

終末期における心理と文化

— 「お迎え」？それとも譎妄？  
在宅ホスピスの現場から

T. OHMURA

東北大学文学研究科・医療法人社団爽秋会岡部医院

大村哲夫

## はじめに

- 死に瀕した人は、さまざまなイメージを見ることが知られている。（臨床的には7-8割にみられる）
- 医学的には「譫妄」と言われ、本人・家族や医療者に不安を与えるとして、薬物を用いた「鎮静 sedation」の対象とされることがある。すなわちネガティブな症状として捉えられている。
- 一方臨死期の幻視は、文化的に「お迎え」としてポジティブに受け止められることがある。
- 本発表では、この「お迎え」という宗教的経験が文化的にどのような変遷を辿ってきたのか、心理的にどのような意味を持っているのかについて明らかにしたい。

# 「譫妄」と「お迎え」

- 「譫妄」：臨死期などにおける精神的錯乱。臨床的には報告者による変動が大きいが，7-8割にみられるとされる。

「認知機能の全般的障害を伴う意識障害 [...] 一般に，情動不安定性，幻覚または錯覚を伴い，また不適切で，衝動的，非合理的，暴力的行動を伴う。ほとんど急性で可逆的な精神疾患である...」

[カプラン臨床精神医学ハンドブック DSM-IV-TR診断基準による診療の手引き 第2版]

- 「お迎え」：臨死期の人が，神仏やすでに亡くなっている人物，死にまつわる特殊な風景など非現実的なイメージを見る体験。

# 「在宅ホスピス遺族アンケート」から

- 在宅で看取りを行った事例における遺族に対する  
悉皆調査

366/682票 回収率57.5%

(1/Jan./2003 - 31/Jan./2007)

「患者さまが、他人には見えない人の存在や風景  
について語った」 42.3%

## 「故人が見えた，聞こえた，感じたらしいもの」

すでに亡くなった家族や知り合い	52.9%
そのほかの人物	34.2%
お花畑	7.7%
仏	5.2%
光	5.2%
川	3.9%
神	0.6%
トンネル	0.6%
その他	31.0%

複数回答可

# 「他人には見えない人の存在や風景」 に遇って

- 遺族からみて、故人がどのように感じているように見えたか？

ポジティブな回答： 65.1%  
普段どおり，落ち着いたよう，安心したよう

ネガティブな回答： 58.7%  
不安そう，悲しそう，苦しそう，怒っているよう

複数回答可

## ● 家族など（回答者）はどう感じたか？

故人の死が近いと感じた	47.7%
幻覚だと思った	40.0%
悲しかった	30.3%
おどろいた	28.4%
不安になった	28.4%
死後の世界に思いをはせた	14.2%
気にしなかった	8.4%
治療が必要だと思った	5.2%
安心した	3.9%
その他	6.5%

複数回答可

# 臨床の現場から

—2007-2008年（医療法人社団）爽秋会 大村採集

1. お嫁さんを亡くなったお姉さん？と勘違いし、  
「俺，そろそろ逝くから」と言っている。

（70代男性）

2. 「じいちゃんとはあちゃんがお父さん（亡く  
なったご両親と夫）と一緒に来たの」

（70代女性）



3. 「じいさんに会った。仏が見えるとかって言うてました。お迎えが来てたんですかね」と死後娘による振り返り。 (70代男性)
4. 日中覚醒時, 「あざらし」が見えて怯えた。 (50代女性)
5. 夢の中で死んだ夫が来て, 月見に誘った。怖かった。 (80代女性)

6. いらいらして「早く死にたい」と言っていた患者さんが、Th.の「先に逝った親しい人が迎えに来ることがあるそうですよ」という声掛けに、

「そうですか、祖父が来てくれますか。私は祖父に育てられたようなものです。会えるんですね。」と穏やかにになり一週間後に亡くなった。

(70代男性)

# 患者と看護師の会話

- Nsを認識している言葉聞かれるが、うつろな表情で「観音様がいらしたから・・・」

〈何処に居ますか？〉とたずねると  
「眼の前にいる」

〈側にお父さん（亡夫）は居ませんか？〉と問うと  
「青森に出張してるから居ないわ」

〈忙しいから遅れてくるのかしらね？〉と返すと  
「だから見えるところに立っている、と言ってる  
みたいよ」  
（70代女性）

# 「お迎え」概念の成立

- 源信『往生要集』(985)には、死後阿弥陀仏のいる極楽世界に往生するために、念仏修行を行わずる事を勧めている。そうすることによって阿弥陀仏等が「来迎引接」とされる。
- ...弥陀如来 [...], もろもろの菩薩, 百千の比丘衆とともに大光明を放ち, 皓然として目前に在します。

## 「お迎え」の語について

『日葡辞書』（1603）には「お迎え」の語はなく、「むかいとり，る，った」に次のように記されている。

...迎えに行つて受け取る。（用例）声を尋ねて迎へ取らせられうずるとの儀じゃほどに，構えて念仏を怠らせられな（平家）卷二

「来迎」は、「来たり迎ふ」として

阿弥陀，あるいは，他の仏が靈魂を迎え取りに来る，あるいは，現れること。この語は，デウスやアンジョに適用することができる。

- 「来迎」とほぼ同義である語に「影向」がある。

別の世から仏，あるいは聖者が来ること，あるいは，現れること。

また

「瑞夢」として

夢の中での啓示

の記載がみられる。

- なお調査中であるが、
- 近世に至るまで「お迎え」は「来迎」，「影向」とほぼ同義で用いられている。江戸期には死のメタファーとしての用法が見られるが，現代のアンケートからみられるような，「仏以外の近しい死者等による」ものは見いだせない。
- 「いったいいつから家族や友人が〈お迎え〉に来ることになったのか」（諸岡et.al.）

## 「お迎え」による死の受容

- 通常「お迎え」は，親しい死者が迎えに来たので安心して逝ける，というように肯定的に語られる。



- 本人は（宣告されるのではなく）自らの死期を悟り（身心ともに受容する），  
家族はお別れの近いのを知る。
- もう逝くときがきた，と自他共に納得できる場合は，安心できる看取りにつながる。



# 「お迎え」の心理学的考察

- 「お迎え」という現象を，深層心理学の観点から考察してみたい。

# 心理療法より効果的な「お迎え」

## 「お迎え」が来る

- 親しい死者がいる世界が存在し，その世界で生きることができる。
- 自我意識の消滅や，この世との断絶がない。
- 必要な時にこの世と行き来することができる。
- その世界には親しい死者が案内してくれる。



死の恐怖の克服と安心

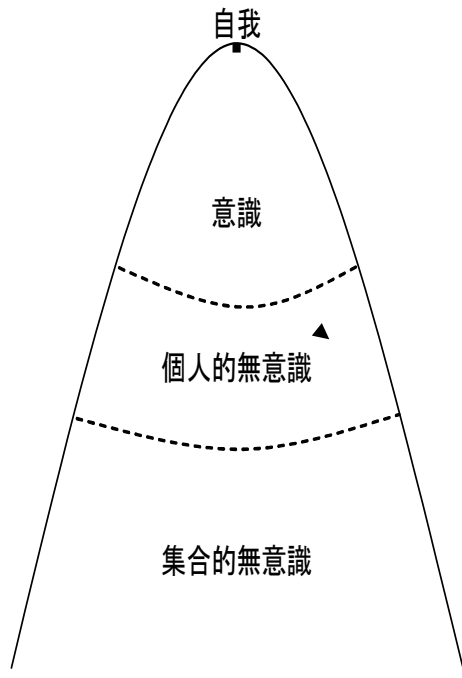
死後のことを語れず，生きることのサポート（自我強化，共感など）が中心となりがちな心理療法より，短時間で死を受容できる（腑に落ちる）概念であるといえる。

## 否定的な「お迎え」

- しかし、「死者があの世に（無理に）連れて行こうとしている」と否定的な語られかたもみられる。
- 特にまだ若く，死ぬのは早すぎると思われるケースでは，かえって不安の増悪がみられた。
- 「一般的に受け入れがたい死」早世，特定の疾病などではお迎えは語られない。
- 「お迎え」概念を共有していない場合は，イメージに対して否定的に見ることがある。

# 「お迎え」の深層心理的考察

- 「死」などの厭うべきものは通常自我によって抑圧され無意識化されている。
- 死の床にある患者は、意識レベルの低下によって、無意識に開かれた心理状態になる。
- 意識によって抑圧されてきた「死」に纏わる記憶などが、活性化され像を結ぶ。



心の構造：原図・河合隼雄 改変・大村

受容→ よい「お迎え」  
拒否→ 良くない「お迎え」,  
「譫妄」

患者・家族・医療者の宗教観や文化的背景によって受容か拒否となる

## 文化としての「お迎え」 一何が見えるか？

- 意識低下時に見えるイメージに何を「**投影**」するか？
  1. 親，祖父母，配偶者，親戚，兄弟姉妹などの家族。
  2. 神，仏など宗教的な存在。

臨床では神仏より，本人にとって親しい家族が多く迎えに来ている。（遺族アンケートほか）

その人の人生**経験**（個人的無意識）や，地域の文化（集合的無意識）に影響される。

人類に共通する原始的な表象：「元型」として人物などのイメージが見え，それが文化や教義によって色づけされた場合死者や神仏等となるのではないか？

T. OHMURA



来迎図 知恩院蔵 (13-14世紀)



ドメニコ・カブラニカ『往生術』1513, フィレンツェ  
(フィリップ・アリエス『死を前にした人間』みすず書房 1990より転載)

# まとめ

- 意識レベルが低下すると無意識への抑圧が弱まり、無意識のイメージが活性化される。
- その時見えるイメージは、洋の東西を問わず見られることから「元型」と呼んでもよい。
- このイメージは、当人の経験や宗教観など文化的なものが投影されさまざまな姿をとる。
- 親しい死者などが迎えに来きたり神仏が来迎する現象は、肯定的な死後世界の存在や彼此の交流を暗示することから、臨死者はもとより遺される者への慰めとなる。



- 看取りに関わる文化・宗教とは、究極のところ自他の死をどう受容するかということにつきる。
- 臨死者の意識が低下し、個人的無意識からさらに集合的無意識へと開かれていくことは、自我の消失とともに、個人の限界を超えた集合体への帰着と考えることもできる。

# 意識の孤立と無意識の連続性

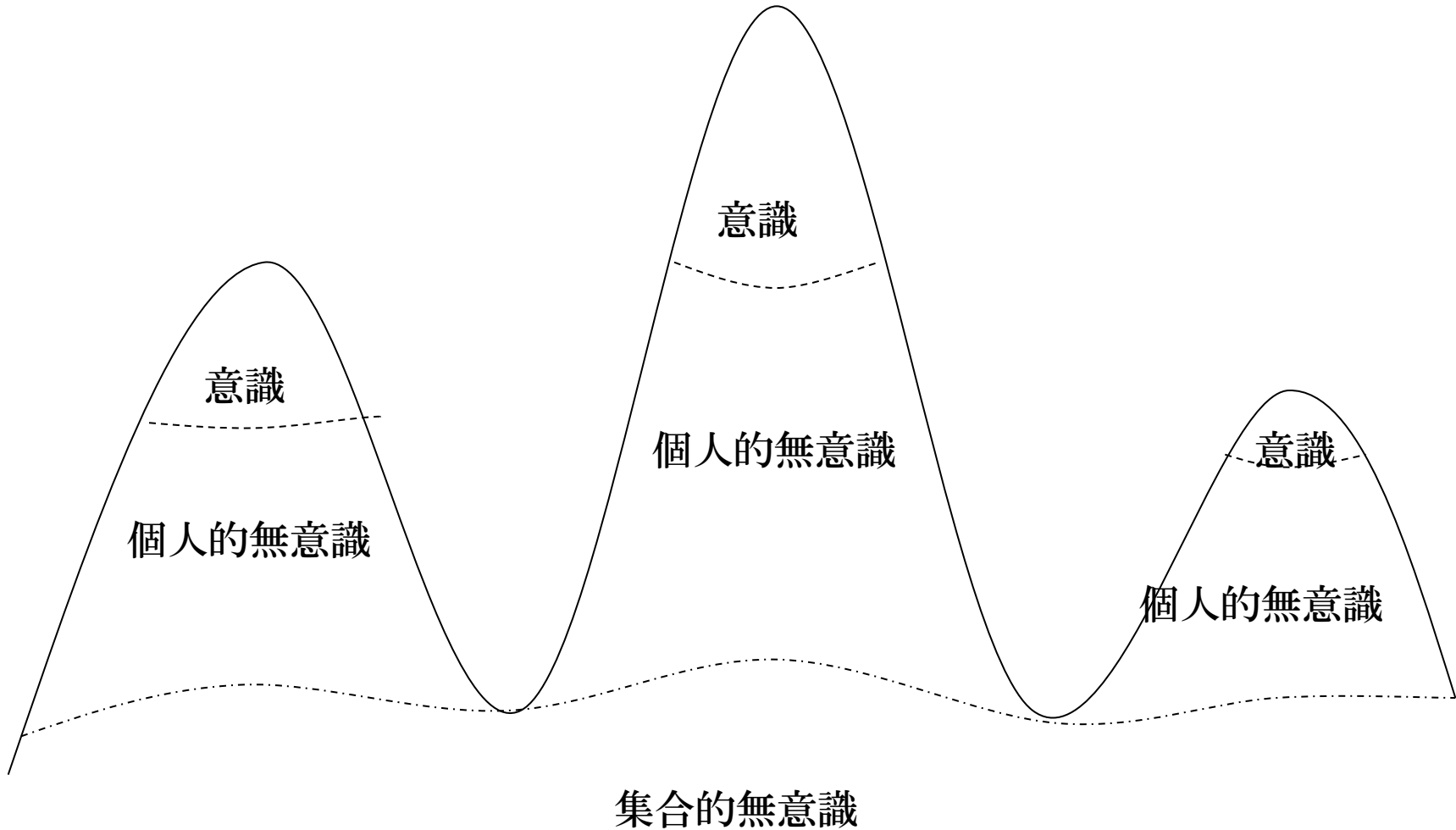


Fig. 意識の孤立と無意識の連続性—自他のこころの構造 大村哲夫作図

## 今後の課題

- 「お迎え」と来迎との関係
- 神仏ではない「近しい死者」による「お迎え」の成立

## 文献

- アリエス, F. 『死を前にした人間』 みすず書房, 1990
- 土井忠生他編訳 『邦訳日葡辞書』 岩波書店, 1980
- ユング, C.G. 『元型論 〈増補改訂版〉』 紀伊國屋書店, 1999
- 河合隼雄 『無意識の構造』 中央公論社, 1977
- 源信 『往生要集』 岩波書店, 1992

- 諸岡了介, 相澤出, 田代志門, 岡部健「現代の看取りにおける〈お迎え〉体験の語りー在宅ホスピス遺族アンケートから」『死生学研究』2008年春号
- サドック, B.J. サドック, V.A.『カプラン臨床精神医学ハンドブック DSM-IV-TR診断基準による診療の手引き 第2版』メディカル・サイエンス・インターナショナル 2003
- 東北在宅ホスピスケア研究会『2007（平成19）年6月実施 在宅ホスピスご遺族アンケート報告書』2008.6.28